

はじめに

建陽余氏は、南宋前期から清初にかけて、福建建寧府建陽崇化里書坊街で代々書坊(出版業者)を営み続けた一族である。先に拙稿「萃慶堂の歴代主人について——建陽余氏刻書活動研究(1)」——附「書林余氏重修宗譜」「書坊文興公派下世系第三十七世までの翻刻と校訂(『中国古典小説研究』第一九号、二〇一六年。以下「前論」と称す)にて、明代後期の万暦年間から清初にかけて活動が確認出来る余氏の刻書家には、『書林余氏重修宗譜』(以下「宗譜」と略称)の載せる「書坊文興公派下世系の第三十四世余彰徳の血を引く萃慶堂系統、同じく第三十三世余孟和(彰徳の叔父)の血を引く雙峰堂系統、同じく第三十四世余福海(彰徳の次兄)の血を引く永慶堂系統」と、誰一人として『宗譜』に名が見えず他系統との血縁関係が不明な自新齋系統、という四つの血統が確認出来ることを指摘した¹⁾。

前論では、そのうち萃慶堂系統に属する刻書家について、各自の名・字・号、活動時期、書坊名などを掘り下げた。本稿では自新齋系統について同様の考察を進めたい。

一、嘉靖隆慶間の自新齋

現在知られている自新齋の最も早い刊本は、卷二・三・四の各巻頭第四行に「書林自新齋余氏刊行」とあり(卷一は刊行者名なし)、大尾に「聖賢語論迺孔門之遺書垂訓之/法言學者誠能潛心玩味以窮其/理而力行之則知格物致知之要/修齊治平之道不外是耳本堂請/莆邑陳先生校讐無謬謹依官本/大字鈔梓以便讀者披閱可認余/氏自新齋之記幸鑒是歲/嘉靖癸巳(十二年、一五三三)仲夏之吉謹識」の有界双辺長方木記を持つ「新刊標題明解聖賢語論」四巻首一巻(上海図書館等蔵)である。それに次ぐのが大尾に「嘉靖辛丑歲(二十年、一五四一)孟口/余氏自新齋梓口」の長方木記を持つ「孟子」二巻(哈佛燕京図書館蔵)だが、これら二書には自新齋主人の個人名は記されていない。

現在知られている最も早い刊行者の個人名を記した自新齋刊本は、嘉靖二十八年(一五四九)刊の『新刊憲台考證綱目批點音釋資治通鑒大成』二十一巻(東北師範大学図書館蔵、筆者未見)で、余允錫の手になるといふ。

余允錫による自新齋刊本は、管見の限り他に卷一「首第四行に「自新齋 余允錫 梓行」とあつて大尾に「龍飛嘉靖甲寅歲(三十三年、一五五四)冬月/書林余氏自新齋刊行」の

双辺長方木記を持つ『新刊類編陰陽選擇合併通書大全』十七卷
（アメリカ国会図書館蔵）と、巻一首第二〜五行に「次崖
林希元 批點／門人 葉文山 編校／門人 鄭汝霖
編校／自新 余允錫 梓行」（傍線部は行の中間に共通
で一つだけ記す文字。以下同）とあり、大尾に「嘉靖辛酉
（四十年、一五六一）春月余氏自新齋刊」の双辺長方木記を
持つ『新刊正續古文類抄』二十卷（台湾国家図書館蔵）があ
る。後者の例では、「自新」が余允錫個人の号として用いら
れているようにも見える。但し、これは葉文山と鄭汝霖の
身分を表す「門人」と並列されているので、余允錫が個人的
に自新と号した訳ではなく、自新齋主人という身分を表し
ているだけかもしれない。

自新齋の嘉靖刊本は他にもあるが、允錫以外の刊行者名
を記すものは知られていない。続く隆慶年間の自新齋刊本
は、巻一首下層第二〜三行に「星源游氏興賢堂述集／書林
余氏自新齋梓行」とあり、大尾に「隆慶四年（一五七〇）夏五
月聚奎堂同自新齋刊行」の単行木記を持つ『新刊批註分旨四
書白文便覽』六卷（加賀市立中央図書館聖藩文庫蔵）が唯一
知られる。同書には刊行者の個人名は見えない。

二、「万曆元年刊本」の問題点

次の万曆年間には、余良木（号紹崖）、余良相（号明吾）、
余文杰（号泰垣）という三人に自新齋名義での刻書活動が確
認出来る。このうち、紹崖余良木と泰垣余文杰には、いず

れも先行研究や所蔵機関の目録において「万曆元年刊」とさ
れている刊本がある。ところが、万曆元年の次に活動が確
認出来る年は、紹崖余良木は万曆十四年、泰垣余文杰に至
っては万曆三十年前後まで下ってしまう（詳細は次章で述
べる）。どちらもそれ以降は数年以内に複数の刊本を出し
ており、彼らが本当に万曆元年に活動していたとしたら、
良木でも十三年、文杰となると約三十年もの活動の空白期
間が生じてしまう。これは不自然と言わざるを得ない。

そこで、「万曆元年刊」とされているものは、それが確か
なかを確認する必要がある。遺憾ながら現時点ではその
全てを調査するには及んでいないが、万曆元年刊と認める
べきものが見つかからない反面、万曆元年よりもずっと後に
刊行されたことが明らかな事例が見つかっている。

まず、大尾に「萬曆新歲孟秋月／自新齋余紹崖梓」の蓮牌
木記を持つ『鼎鑄金陵三元合評選戰國策狐白』四卷（瀋陽師
範大学図書館「筆者未見」、プリンスストン大学東亜図書館
蔵）は、巻一首第六行に「書林 自新齋 余良木 繡
梓」、巻二首第二行に「書林 自新齋 余泰垣 綉梓」、巻
三首第六行に「書林 泰垣 余文杰 繡梓」、巻四首第
二行に「書林（隔八格）繡梓」、巻一首第二〜五行に「會元

繡林 湯賓尹 精選／狀元 蘭圃 朱之蕃
評註／解元 蘭谷 龔三益 摭評／後學

豪卿父林世選 彙編」と見える。王宇「稀見善本《戰國策狐
白》考証」（『図書館雑誌』二〇一三年第三期）は、湯賓尹・朱

之蕃・龔三益・林世選の生年や科擧及第年を根拠に、同書は万暦元年刊本ではあり得ず、ここでの「萬曆新歲」は「万暦年間のある年の新春」を指すに過ぎないと指摘している。「新春」に限定する点には疑問が残るが、万暦元年刊本ではあり得ないという指摘には疑問の余地が無い。王氏は続けて万暦二十年代から三十年代にかけて自新齋が湯賓尹の評註と謳つて書名を「狐白」で結ぶ書物を多数出版していることを挙げて、同書も朱之蕃と湯賓尹が状元・会元として及第した万暦二十三年以降、かつ龔三益が病を理由に官を辞した万暦四十三年以前に刊行されたと見るべきだと唱えているが、刊年は次章でより詳しく考察する。

また、福建省古玩商会のブログ記事「禁書半隅之三 明万历元年刊本『评林历朝捷录』」に、『鼎鐸歷朝捷録百家評林』八卷(同会蔵?)の巻首・大尾蓮牌木記・半葉全面形式の挿画三幅の、計五枚の書影が掲載されている。同ブログは大尾蓮牌木記の「萬曆新歲孟秋月／自新齋余紹崖梓」を根拠に、同書を万暦元年刊本と認定している。しかし、前述の通り「萬曆新歲」は万暦元年という意味ではない。同書の挿画の画風は万暦二十年代後半以降に流行した徽派のそれであるし、挿画が全四幅だという情報と、掲載されている三幅がそれぞれ巻一・巻三・巻不明の第一葉表であることを踏まえると、奇数巻の第一葉表に半葉全面形式の徽派挿画を配しているのであろう。概ね万暦三十年前後の刊行と見られる文台余象斗刊本『新刊京本校正演義全像三國志傳

評林』二十卷(早稲田大学図書館蔵)が、上図下文である他に奇数巻の第一葉表は半葉全面の徽派挿画とするなど、類似の形式は万暦後期の建陽刊本に散見される。従つて、同書は万暦半ば以降の刊行と見るのが妥当だろう。

他にも万暦元年刊とされる紹崖余良木刊本や泰垣余文杰刊本はあるが(注3参照)、いずれも筆者未見で、何を根拠に万暦元年刊とされているのかも不明である。しかし、自新齋系統の書坊は「萬曆新歲」の蓮牌木記を頻繁に用いたようなので(後述の怡慶堂も使っている。注16参照)、それらも「萬曆新歲」を根拠とした誤解である可能性があるだろう。そのため、本稿では、ある年号の元年刊と著録されている筆者未見の刊本は、確かな根拠が明示されていない限り、刊年未詳のものと同等に扱うものとする。

三、万暦以降の自新齋

「万暦元年刊本」とされているものを除けば、紹崖余良木と明吾余良相は万暦十年代から、泰垣余文杰は万暦三十年前後から、それぞれ複数の刊本を刊行している。してみれば、活動時期が重なり名の一字を共有する余良木と余良相が兄弟ないし堂兄弟で、彼らより二十年ほど遅れて現れ、かつ名に「良」字が付かない余文杰は、彼らよりも一つ下の世代の人物だったのではあるまいか。万暦元年刊本を認めなければこのようにすつきりと整理出来ることも、筆者が未見の「万暦元年刊」の紹崖余良木刊本や泰垣余文杰刊本も

刊年の誤認ではないかと疑っている一因である。

以下、彼らの具体的な刊本の一部を挙げて、それぞれの名・字・号や活動実態を確認してゆきたい。

(一) 紹崖余良木

まず、余良木から見て行こう。まず、「紹崖」が彼の号であることは、既に謝水順・李珽注3書二五四頁が、万曆四十二年自新齋刊本「精選畢業切要書史粹言分類評林諸子狐白」四卷(復旦大学図書館蔵、筆者未見)の巻首に「書林紹崖余良木梓行」とあることを挙げて指摘している。なお、これは余良木の名が見え、かつ刊年が分かる刊本としては、現在知られる最も刊行が遅いものである。

一方、筆者が現在確認している中で最古の余良木刊本は、無界の封面中央に「韓朋十義記」と大書してその左右に「萬曆丙戌(十四年、一五八六)冬月/余氏紹崖梓行」とあり、巻首第二行に「新安余氏自新齋梓行」と記す「新刊韓朋十義記」二巻(パリ国立図書館蔵)である。ここに「新安余氏」とあるのは、建陽余氏の一族が新安余氏の流れを汲むと自認していたためであつて(前論参照)、同書が徽州新安で刊行されたという意味に解するべきではない。

なお、表野和江「宰相の受験参考書——李廷機と卒業書出版」(『藝文研究』第八七号、二〇〇四年)一八九頁が「新鏤評釋東萊呂先生左氏博議」四卷(九州大学附属図書館蔵、筆者未見)を右よりも早い万曆十一年余良木刊本と著録する

が、同館OAPCによると大尾の刊記に「萬曆癸巳歲(二十一年、一五九三)夏月余紹崖梓」とあるというから、万曆十一年刊とは表野氏の誤記であろう。巻首には「書林 紹崖 余良木 梓」とあるとのことで、余良木が万曆年間の前半から「紹崖」と号していたことが確かめられる。

なお、嘉靖間の余允錫と同じく、余良木にも「自新」を一見すると号であるかのように使う例がある。大尾に「萬曆癸巳歲(二十一年、一五九三)冬月/自新齋余紹崖梓」の蓮牌木記を持つ『鏤南華真經三註大全』二十卷(国立公文書館内閣文庫「二本」、慶應義塾大学図書館、東北大学附属図書館等蔵)の巻一首第二〜三行に「澗秀水 會魁陳懿典輯/閩書林 自新余良木梓」とあるのだ。しかし、允錫の場合と同様、ここでも「自新」と並列されている「會魁」は陳懿典の号ではなく、身分である。してみれば、允錫も良木も個人的に「自新」を号とした訳ではなく、「自新齋主人」の意味で姓名の上に「自新」を冠することがあつたに過ぎないのではあるまいか。なお、同書は右記の通り伝本が多いが、その中で内閣文庫蔵本の片方(高野山釈迦文院旧蔵)だけは、本来の序の他に、前述の嘉靖三十三年余允錫自新齋刊本「新刊類編陰陽選擇合併通書大全」の序二種計三葉が紛れ込んでいる。この三葉も他の葉と同質の紙に刷られているので、収蔵者の錯綴による混入ではなく、出售以前の印刷の段階で混入したのであろう。つまり、余良木は余允錫の作つた版木を継承していたことになる。

紹崖余良木の刊本は比較的多く、紙幅の都合上ここで全てを列挙は出来ない。謝水順・李斑注3書二五四〜六頁のリストや、方彦寿注3書二八四〜五頁等を参照されたい。

なお、Lucille Chia “Printing for Profit — The Commercial Publishers of Jianyang, Fujian(11th-17th Centuries)” (Harvard University Asia Center, 2002)八九頁の系図では、余紹崖を『宗譜』に載る萃慶堂系統の第四十世余紹芳の兄弟と推定している。しかし、『宗譜』が紹芳の曾祖父とする第三十七世余元燾は、崇禎順治間に刻書を行っている(前論参照)。紹崖余良木は万曆前期から活動しているので、元燾の曾孫に当たることはあり得まい。

(2) 明吾余良相

余良相が「明吾」と号したことは、「萬曆己亥歲(二十七年、一五九九)夏月/自新齋余明吾梓」の蓮牌木記を持つ『重刻申閣老校正朱文公家禮正衡』八卷(内閣文庫等蔵)の巻一首第二〜三行の「閩 武夷 海東 彭 濱 校補/閩 書林 明吾 余良相 梓行」から読み取れる。同書冒頭には半葉全面形式の徽派挿画が九幅まとめて附され、画風は前述の『鼎鏤歷朝捷録百家評林』の挿画と一致する。

なお、方彦寿注3書二八五頁では「余明吾、字良相」という筆者と異なる名・字の解釈を採るが、巻頭題署において名が「姓十字(または号)」の上に来る例は見た覚えがないし、右の例で「余良相」と並列されている「彭 濱」も明らか

に姓十名なので、良相は名と見るべきであろう。一方、前論で述べた通り当時にあつては号と字の区別が非常に曖昧だったようなので、「明吾」は字であつた可能性や、字と号を兼ねる呼称であつた可能性もある。なお、自新齋系統以外の三系統の余氏の刻書家には字と号がどちらも判明する人物が少なくないが、自新齋系統の刻書家には、その両方が判明する人物は、目下のところ見つかつていない。

明吾余良相の手になる刊本は、他に万曆十九年刊たという筆者未見の『兩漢萃寶評林』三卷(中国国家図書館、上海図書館等蔵)が知られるのみだが、同書は大尾に「萬曆庚寅(十八年、一五九〇)秋自/新齋余紹帷梓」の蓮牌木記を持つ『史記萃寶評林』三卷(中国科学院図書館等蔵)の姉妹編である。おそらく、余良相は余良木を輔佐するような形で自新齋の経営の一部を担っていたのであろう。

(3) 泰垣余文杰

余文杰が姓名と同一行内で「泰垣」とも名乗っている例は、既に前章で『鼎鏤金陵三元合評選戰國策狐白』の巻三首第六行を挙げた。王字前掲論文はそれによつて泰垣と文杰を同一人物と認めて良いかどうかの判断を保留する慎重な態度を取るが、万曆甲寅(四十二年、一六一四)余氏自新齋刊本『新刻韓會狀註釋莊子南華真經狐白四卷』(台湾国家図書館蔵)の巻一首第二〜四行にも「太史 霍林 湯實尹 校閱/會狀 求仲 韓 敬 註釋/書林 泰垣 余文杰 梓

行」と見える。また、大尾に「崇禎甲戌（七年、一六三四）孟秋／吉且余泰口梓の蓮牌木記を持つ『新刻申會魁家傳課兒四書順文捷解』六卷（内閣文庫蔵）の巻一首第二、三行には「會魁 維烈 申紹芳 輯書／書林 太垣 余文杰 繡梓」とある。これらの例から、「泰（忒）垣」が余文杰の号（または字）であつたことは確実と言える。

なお、右の『新刻申會魁家傳課兒四書順文捷解』は、筆者が自新齋系統に分類している刻書家による刊本の中では最も刊年が遅いのだが、蓮牌木記の「崇禎甲戌」の四字は他よりも一回り太い字となっており、これは埋木改刻であるかもしれない。その場合、この本はより早くに作られた版木による崇禎七年印本だということになるが、「申會魁」こと申紹芳は万曆四十四年（六一六）の進士であるから、万曆四十四年以降の刊であることは確実である。仮に万曆四十四年刊だとしても、自新齋主人と確認可能な人物による刊本としては最も新しい。また、刊行者名は巻首でも蓮牌木記でも泰垣余文杰であり、彼の署名には改刻の跡は見られないので、年次が改刻だつたとしても、その改刻を行ったのは元々の刊行者である余文杰自身だつた可能性がある。

一方、確かな刊年の手掛かりがある泰垣余文杰刊本の中で最も早いものは、末尾に「皇庚戌歲（万曆三十八年、一六一〇）春月穀旦／ 觀音山主人林世選頓首拜言」と署名する「重刻湯先生左傳狐白引」を持つ『重録增補湯會元遊輯百家評林左傳狐白』四卷（内閣文庫「二本」等蔵）で、巻一・四

の各首第五行に「自新齋 余泰垣 重梓」（巻二は「重梓」が「繡梓」、巻三にはこの行なし）とある。

但し、余文杰が刻書活動に関わり始めた時期は、おそらくもう少し遡り得る。前章で触れた『鼎鑄金陵三元合評選戰國策狐白』四卷は、巻一首と大尾蓮牌木記には紹崖余良木の名が見えるが、巻二・三の各首には泰垣余文杰の名が見えていた。王宇前掲論文では、巻によって刊行者が別人ということがあり得るのだろうかという疑問を呈しているが、金陵の周氏万巻樓が、万曆初期から後期にかけて、巻ごとに同族ながら別人の刊行者名を記した刊本をしげしげ刊行しており、この例と同じく刊行者の名が見えない巻が含まれているものもある。つまり、これは当時の刊本には間々あることであり、この点を訝しむ必要は無い。従つて、同書は余紹崖が現役の自新齋主人であつた間に、次世代の余文杰と共同で刊行したものということになる。

王宇前掲論文では万曆二十三年から四十三年の間の刊行と推定されていた同書だが、王氏未見のプリンストン蔵本によれば、もう少し刊年を絞り込める。プリンストン蔵本は、元々それぞれ単行本だつた『左伝』『国語』『戦国策』『史記』『秦漢』の各「狐白」を集めた『諸史狐白合編』という叢書であり、「左丘明春秋／左傳狐白」「左丘明春秋／國語狐白」／『劉向校定戰／國策狐白』／『司馬遷太史／史記狐白』／『先秦東西兩／漢書狐白』 余紹崖梓／諸史狐白合編（宋行大字）と記した全体の封面を持つ。

このうち『史記狐白』六巻は、巻首題が『鼎鑄金陵三元合選評註史記狐白』という『戦国策狐白』と殆ど同じ角書になつていて、巻一首第二く六行に至つては前章で引いた『戦国策狐白』のそれと全くの同文である。『史記狐白』は大尾に「萬曆歲次庚子（二十八年、一六〇〇）孟秋／書林余氏自新齋梓の蓮牌木記を持つている。一方で、『史記狐白』の続編に当たる『秦漢狐白』四巻は、大尾に「萬曆甲辰（三十二年、一六〇四）仲秋余紹崖梓」の双辺単行木記を持つが、巻首題は『新鍔張狀元遜輯評林秦漢狐白』で、編者が万曆二十九年の狀元たる張以誠に代わつてゐる。して見るに、『戦国策狐白』の刊行は『史記狐白』と近い時期で、『秦漢狐白』よりは早かつたのではないだろうか。

ところで、『史記狐白』の各巻首題のうち『史記狐白』の四字には、埋木改刻の痕跡が見られる。対して、『戦国策狐白』の各巻首題には埋木改刻の痕跡は見られない。そして、『狐白』の文字が埋木改刻によるのは、残る『新鍔湯會元遜輯評林左傳狐白』四巻と『新刻湯會元精遜評釋國語狐白』四巻にも共通する。この二種は内閣文庫に同版でより刷りの早い本が残るのだが、内閣文庫蔵本では序も目録も巻首も「狐白」の箇所が「狐型」となつてゐる。つまり、プリンストン蔵の『諸史狐白合編』に収める『左伝狐白』と『國語狐白』は、元々『左伝藝型』と『國語藝型』であつたのを改題した後修本なのである。内閣文庫蔵の『國語藝型』の大尾には「萬曆丙申禊（二十四年、一五九六）冬月／自新齋余氏

梓行」の蓮牌木記があり、これはプリンストン蔵の後修本でも変わつてゐない。してみれば、『諸史狐白合編』五種のうち、少なくとも『左伝』と『國語』の書名は、叢書に収めるに当たつて全体の統一を図るべく改題して「狐白」になつたものと推測される。

では『史記狐白』はどうか。目録と巻一、四の首題の「史記狐白」四字は明らかに埋木改刻なのだが、巻五と巻六ではそれが明白ではない。そして、末尾に「湯賓尹書」と署名する『刺史記狐白序』では、「狐白」の文字が改刻ではないどころか、「狐白」とはいかなる意味であるかが滔々と述べられている。となれば、考えられる可能性は二通りだ。一つは、元々別の書名で刊行されていたが、「狐白」に改題した後修本を刊行するに当たつてこの序を附した。もう一つは、別の書名で刊行するつもりで版木を作り始めたが、序を書くに当たつて思いついた「狐白」という美称を急遽使うことになり、初印本の出售よりも前に既に改刻を済ませていた。どちらの可能性もあり得るだろうが、いずれにしても、「狐白」の意味をわざわざ長々と説く序が附されている以上、「狐白」を書名に用いる刊本はこの『史記狐白』が初めてだつたのではあるまいか。「狐白」を含む書名の刊本は他にも幾つかあるのだが、「万曆元年」余紹崖刊本とされている筆者未見の『通鑑纂要抄狐白』六巻首一卷（北京師範大学、清華大学蔵）を除けば、刊年の知られるものはいずれも万曆三十年代以降の刊である¹⁰。となれば、「狐白」の二

字が改刻ではない『戦国策狐白』は、『史記狐白』よりも刊行が遅いと見て良いのではないか。

以上より、『鼎鑄金陵三元合評選戦国策狐白』の刊年は、万曆二十八年から三十二年の間まで絞り込むことが出来る。この頃から余文杰が自新齋の経営に加わるようになる。二世代による経営が以後十数年続いたのだろう(但し、『諸史狐白合編』五種のうち、『戦国策』以外の四種には、刊行者の個人名は紹崖余良木しか挙がっていない)。

なお、萃慶堂にも万曆三十年代に余彰徳と余應良、崇禎年間に余應良と余昌宗と、父子が同時期に主人を務めることがあった(前論参照)。してみれば、文杰は良木の息子である蓋然性が高からう。先代が現役バリバリのうちに後継者に経験を積ませるのが余氏の書坊の流儀だったようだ。

四、自新齋と他の建陽余氏書坊

自新齋の歴代主人の活動状況は前章までに見た通りである。前述の通り、彼らは『宗譜』には全く載っていない。

前論で触れた通り、萃慶堂系統・雙峰堂系統・永慶堂系統の共通の祖先である第三二世の余継安(字履泰)が嘉靖十二年に清修寺を再建し、そこに版木を集めて印刷出版を行っていた。初期の自新齋刊本は余継安の活動時期に重なるが、『宗譜』は継安を嘉靖三十一年没としているから、それ以降にも活動している余允錫は、継安と同一人物ではないだろう。

もし允錫が『宗譜』に載る誰かの字号か別名だとしたら、活動時期からして第三二世か第三三世辺りに相当しうだが、第三三世の仲明の子孫は萃慶堂系統、孟和の子孫は雙峰堂系統であるから、この二人の可能性は非常に低い。一方、第三二世の洪・世能・世昂や、第三三世の升郎・定郎は『宗譜』が子孫を失考しているの、彼らのいづれかが允錫であった可能性は考えられる。また、三十世の萱・元貴や三十一世の武・静といった、継安より前の世代で子孫を失考している人物の子孫が允錫だという可能性もある。また、允錫が『宗譜』に漏れた継安の息子か、年の離れた弟という可能性もあるだろう。なお、嘉靖十二年や同二十年の自新齋刊本は允錫よりも上の世代の人物の刊行かもしれない、その人物が継安ということもあり得ない話ではないから、継安が自新齋の経営に関わったことがあったか否かについては、現時点ではどちらとも言えない。

允錫とその後継者たちが、萃慶堂系統・雙峰堂系統・永慶堂系統を輩出した書坊文興公派下世系とは全く別系統の血統だということも、可能性としてはあり得る。しかし、注10で述べたように自新齋特有の書名用語であった「狐白」を雙峰堂系統が少し遅れて採り入れているし、次章で見ると、万曆年間に萃慶堂系統や雙峰堂系統と提携を持っていた金陵の唐氏や周氏の書坊¹¹との間に、自新齋系統もある程度の繋がりを持っていた可能性が高いなど、自新齋は刻書活動の上で右の三系統との近さが感じられる。

血統上も比較的近い間柄だったのではあるまいか。

一方、同じ建陽余氏でも、元代から嘉靖年間まで続いていた雙桂書堂(血統不明)とは、あまり関係が緊密ではなかったらしい。というのも、自新齋の刊本に、大尾に「嘉靖壬子歲(三十一年、一五五二)仲夏/余氏自新齋梓行」の有界双辺長方木記を持つ『新刊憲臺盤正性理大全』七十卷(都立中央図書館蔵)がある。ところが、これと同年に、大尾には「嘉靖壬子孟秋/雙桂書堂新刊」の蓮牌木記、序末には「嘉靖壬子年余氏雙桂堂校正重刊」の双辺単行木記を持つ『新刊性理大全』七十卷(米沢市立図書館蔵)も刊行されているのだ。両書は角書や行款こそ違えど、中身はさほど変わらない。両書坊の間に提携関係があれば、同年に同地域で殆ど同内容の書物を刊行はしないだろう。

また、万曆二十年代から三十年代にかけて、余良史(号秀峰)¹²と余良進(号蒼泉)¹³という人物が、怡慶堂という書坊名で刻書を行っている。謝水順・李珽注3書二五四頁が指摘する通り、この二人は余良木・余良相と同世代で親等が近い人物であろうから¹⁴、怡慶堂名義で活動した人物も、自新齋系統の血統に属すると思われる。怡慶堂主人として活動した人物には、他に万曆末から天啓年間にかけての余完初(名・字・号のいずれなのか不明)がいる¹⁵。怡慶堂刊本の具体例は、謝水順・李珽注3書二五七〜八頁や方彦寿注3書二九七〜八頁を参照されたい¹⁶。そのどちらも載せていない天啓年間の余完初怡慶堂刊本には、封面に

「怡慶堂余完初梓とあり「天啓三年孟夏長洲湛持/文震孟題」と結ぶ「家語正印叙」を持つ「鼎鏡二翰林校正句解評釋孔子家語正印」三卷首一卷(内閣文庫蔵)がある。

なお、自新齋は経・史・子部の基本典籍やら駱賓王や三蘇といった唐宋詩人の別集やらの「狐白本」や「評林」本を数多く手掛けており、卒業書や初学書を中心に活動していたと言えそうだ。対して、怡慶堂はそうした書物も幾らか手掛けはするが、自新齋が全く手を付けていない医書を数多く刊行している。また、自新齋の刊本には、萃慶堂系統・雙峰堂系統・永慶堂系統がいずれも複数刊行している章回小説や、前二者が得意とした通俗類書が全く知られていない。主人ごとの好みや得手不得手もあるだろうが、近縁の書坊間で棲み分けを図っていた部分もあるかもしれない。

五、自新齋と金陵の書坊

注11拙稿において、万曆十年代以降、江西金谿の出身者が金陵で営んでいた唐氏世德堂・唐氏富春堂・周氏万卷樓と、建陽余氏の萃慶堂や雙峰堂三台館とが、互いの刊本を重刊(覆刻)または翻刻する権利を認め合う提携関係にあったことを明らかにした。本稿の結びとして、自新齋もその提携の輪に加わっていた可能性を指摘しておきたい。

まず、表野前掲論文が指摘しているが、第三章で挙げた余良木自新齋万曆十八年刊本『史記萃實評林』三卷と余良相自新齋万曆十九年刊本『兩漢萃實評林』三卷は、共に万曆二

十年に対峰周曰校万巻楼によって同題同巻数で重刊されている(いずれも中国科学院図書館蔵¹⁷)。前論で挙げた通り、この時期には世徳堂・富春堂・万巻楼の刊行した上元王氏の挿画を持つ書物が余象斗雙峰堂によって陸続と覆刻されているので、周曰校万巻楼による自新齋刊本二種の重刊は、それと表裏一体の事業であつた可能性が高からう。但し、余象斗によるそれらの覆刻本が底本の版元である唐氏や周氏の名を必ずどこかに明記するのに対して、周曰校万巻楼刊本『兩漢萃寶評林』には自新齋の名も余良木の名もどこにも記されていない、という違いはある。

また、第三章で挙げた余良木自新齋万曆十四年刊本『新刊韓朋十義記』は上元王氏の初期の画風の半葉全面形式の挿画を持つが、類似の挿画が唐富春富春堂(万曆前期)刊本『新刊音註出像韓朋十義記』二巻(上海図書館蔵)にも見られる。この画風は富春堂が万曆前期に刊行した数十種の戯曲刊本に共通するものであるから、『韓朋十義記』も富春堂刊本の方が先行するだろう。但し、自新齋刊本は本文の版式や字様が富春堂刊本とは大きく異なり、挿画の構図も若干違つていて、字様や版式はむしろ唐氏世徳堂の戯曲刊本のそれに近い。富春堂の戯曲を世徳堂が翻刻した事例が『趙氏孤児記』に認められるので¹⁸、もしかするとこれにも富春堂刊本を翻刻した世徳堂刊本があり、それを更に覆刻したのが自新齋刊本なのかもしれない。いずれにしても自新齋刊本が金陵刊本の重刊本であることは確かだろうが、こ

の本にも金陵の書坊や刻書家の名はどこにも見えない。自新齋と唐氏・周氏の繋がりは、余象斗雙峰堂や余彰徳萃慶堂のそれとは些かスタンスが違ったのであろうか。

最後に、第一章で挙げた『新刊批註分旨四書白文便覽』も、金陵の書坊との連携の上での刊行だつた可能性がありそうだ。なんとすれば、まず同書は巻一首第三行および巻二以降の各首第二行に「星源游氏興賢堂述集」とある(巻五のみこの行を損欠)。この星源游氏興賢堂を名乗る人物の詳細は不明だが、世徳堂が(万曆前期)に刊行した『断髮記』『月亭記』『還帶記』という三種の戯曲を校訂している¹⁹。

その上で、前述の通り同書は大尾に「隆慶四年夏五月聚奎堂同自新齋刊行」の単行木記を持つ。活動時期からすると、三槐堂は建陽王氏三槐堂であらう。後に大尾に「萬曆辛卯(十九年、一五九二)秋九/月書林王祐刊」の連牌木記を持ち、巻一・二・四・六の各首下層第二、四行に「太醫院 醫官 雲林 龔廷賢 編輯/ 豫章 古臨 冲懷 朱鼎臣 校正/ 閩海 書林 三槐堂 王 祐 梓行」とある。『新鍔鯨頭復明眼方外科神驗全書』六巻(上海図書館蔵)を刊行している。龔廷賢は周曰校の姻戚で万巻楼の主力執筆者であつたから(注11拙稿参照)、周氏に何らかの伝手がなければ彼の著書を刊行することは難しかったはずだ。偽作でないならば、三槐堂はかつて共同刊行をした自新齋を通して、周氏との繋がりを得たのかもしれない。

聚奎堂が些か定めがたいのだが、遊氏興賢堂と金陵出版

界の繋がりを念頭に置くと、万暦四十年代から崇禎年間にかけて金陵で活動している少泉李潮聚奎樓²⁰の何代か前に当たるといふ可能性が浮かぶ。もしそうであれば、これは金陵の書坊と建陽の二書坊の共同刊行、ないしは金陵刊本を建陽の二書坊が共同で重刊したものであることになる。

このように、『新刊批註分旨四書白文便覽』の刊記や題署からは、注口拙稿で指摘したよりも、より早い時期から、より多くの書坊の間に広域的な連携があつた可能性が垣間見える。今後の検討課題として提起しておく次第である。

1 なお、『宗譜』に見えず、この四系統との血縁関係の有無も確認不能な余氏の刻書家も、少なからず存在する。

2 巻之首途中の第十四葉裏にも「余氏自新齋刊」と結び刊行識語四行からなる有界双辺長方木記がある。

3 謝水順・李珽『福建古代刻書』（福建人民出版社、一九九七年）二五四頁、方彥寿『建陽刻書史』（中国社会科学出版社、二〇〇三年）二八四頁参照。

4 これに先立ち、黄龍祥「中医古籍版本鑑定常見問題例説」（『文獻』一九九八年第二期）も、「萬曆新歲穀旦」や「萬曆新歲春月穀旦」は「万暦年間のある年の正月の吉日」を指すに過ぎず、これを元年と断定するのは誤りだと、別の具体例を挙げて指摘している。筆者も両氏の説に大筋で異論は無いが、この『鼎鑄金陵三元合評選戰國策狐白』では「萬曆新歲」の直後が

「孟秋（旧暦七月）となつてゐるし、注16後掲の二例も「秋月」や「仲春」（旧暦二月）が続くから、「萬曆新歲」は単に「万暦年間のある年」を指すだけとなつており、本来持つていたはずの「新春」の意味すら失つてゐると見るべきではないだろうか。思うに、版下を作成する際に、（版木の完成が翌年以降になる可能性を考へて）最終的に実際の刊行年の千支に変える前提で木記に「年号+新歲」と書いておく場合があり、それを改めのまま上梓してしまうことが間々あつたということなのではあるまいか。具体的な年次を記す刊本でも、封面と木記で示される刊年が異なる事例は間々あるので（例えば、内閣文庫蔵の忠正堂熊龍峰刊本『重刻元本题評首釋西廂記』二巻の刊年は、封面では庚寅（一五九〇）、大尾の蓮牌木記では萬曆壬辰（二十年、一五九二）となつてゐる）、版木の製作には一〜二年の時間を要することも珍しくなかつたのだろう。

5 URL: http://www.360doc.com/content/14/0819/16/18898950_403096306.shtml 二〇一五年十月九日閲覧。
6 佐藤由美「志伝評林本『三国志演義』について」（『集刊東洋学』第八六号、二〇〇一年）参照。

7 拙稿「金陵書坊周曰校万巻樓仁寿堂と周氏大業堂の関係について」（『斯道文庫論集』第四八輯、二〇一四年）参照。

8 そもそも、プリンストン蔵の「左伝狐白」と「国語狐白」は、巻二〜四の首題は内閣文庫蔵本と同じ「秋型」のままであり、書名を「狐白」に改めてゐるのは序・目録・巻一首だけである。なお、前述の余文杰重刊本『重鏡増補湯會元選輯百家評林左

傳狐白」は、書名を「狐白」に改めた後の余良木刊本を底本とする翻刻である。

9 方彦寿注3書二八四頁に言う通り、「狐白」とは裘の原料となる狐の腋の下の毛を指す。方氏は裘のように良質な編集の本という意味だと解しており、それはそれで確かなのだが、狐白は一頭からは僅かな量しか取れず、裘は沢山の狐からそれを集めて作られるので、「大勢の学者の膨大な説の中から、各自の美点を選び抜いた」という含意もあるようだ(この序に「是書蓋累幾許狐乃得之」とある)。

10 万暦年間のうちは自新齋刊本にのみ見られ、天啓年間になると雙峰堂系統の書坊も用いているが(巻一「首第一」四行に「西安 孟旋方應祥 輯訂/吳江 伯離趙鳴陽 校閱/潭陽 三台館余氏 梓行」と記す壬戌(天啓二年、一六二二)序刊本「鐫方孟旋先生輯訂義經狐白解」八卷(蓬左文庫蔵)がある)、建陽余氏の書坊以外の使用例は極めて稀で、大尾に「萬曆壬子(四十年、一六一二)仲夏月/唐氏世德堂重梓」の蓮牌木記を持つ『通鑑纂要抄狐白』六卷首一卷(プリンス頓大学東亜図書館蔵。おそらく前述の余紹崖刊本の重刊本である)だけしか見つけていない。

11 拙稿「明末の商業出版における異姓書坊間の広域的連携の存在について」(『東方学』第一三一輯、二〇一六年)参照。

12 大尾に「怡慶堂余秀峰梓」の単行蓮牌木記を持つ『新刻太醫院訂正驚頭醫方捷徑』三卷(内閣文庫蔵)の巻上首下層第三行に「書林秀峯 余良史 梓」とある。

13 序末に「萬曆壬寅歲(三十年、一六〇二)仲春搜真子楊崇魁序」とある『新刊官板本草真詮』二卷(内閣文庫等蔵)の各巻首

第三行に「建邑蒼泉余良進刊行」とある。

14 この時期の建陽余氏は、同世代の全員が名に同じ通字を使う訳ではなく、多くの場合それが祖父ごとに違ったり、或いは父ごとに違ったり、場合によっては同父兄弟間でも違ったりしている。そのため、名の通字が共通する場合には、かなり親等が近い可能性が高い。前論参照。

15 前掲の余良相自新齋刊本『重刻申閣老校正朱文公家禮正衡』の九州大学附属図書館蔵本(未見)の封面には「余完初梓」とあるというが(同館OPACによる)、この例だけでは「完初」が明吾余良相の字ないし号だったのか、それとも共同刊行者か版木の継承者かで余良相とは別人か、どちらとも言えない。

16 謝水順・李珽注3書二五七頁は、怡慶堂余秀峰刊本『新刻萬氏家傳廣嗣紀要』五卷(内閣文庫「三本」、上海図書館等蔵)を万暦元年(一五七三)刊と著録するが、これも「万曆新歲」による誤認である。大尾に「萬曆新歲仲春之月/怡慶堂余秀峰梓行」という蓮牌木記があるが、同書の序は「頃刻『保命歌括』推極人臣之忠、載閱『廣嗣紀要』并有感於人子之孝」と始まり、末尾に「賜進士中順大夫黃岡李之用撰」と署名する。この李之用は万暦八年の進士なので、同書が万暦元年刊というのはあり得ない。余秀峰怡慶堂は実際に同書と同版式で『新刻萬氏家傳保命歌括』十卷(内閣文庫「二本」蔵、うち一本は『新刻萬氏家傳廣嗣紀要』の一本とツレで伝来)を刊行しており、そ

らの大尾には「萬曆丁酉歲（二十五年、一五九七）／怡慶堂梓行」との蓮牌木記があるし、序末の署名も「賜進士中順大夫黃岡李之用撰。崑萬曆丁酉仲冬月 日吉題」である。してみれば、『保命歌括』が「頃刻」の書だという『新刻萬氏家傳廣嗣紀要』は、おそらく直後の万曆二十六年（一五九八）二月の刊行であろう。また、巻一首第二行に「會元 憐初 顧起元

考意」、同第六行に「書林 秀峰 余良史 梓行」とある『新刻禮部頒行劉先生手録詩經尊朱約言』十二卷（聖澤文庫蔵）も、大尾に「萬曆新歲秋月／穀旦余秀峰梓」の蓮牌木記を持つが、顧起元は万曆二十六年の探花だし、彼による万曆庚子（二十八年、一六〇〇）の序も備えているので、これまた明らかに万曆元年刊本ではあり得ない。

前者は筆者未見。後者は後叙末に「萬曆壬辰歲（二十年）仲夏／萬卷樓周對峯刊」の蓮牌木記を持つ。『史記萃寶評林』は万卷樓刊本、『兩漢萃寶評林』は自新齋刊本をそれぞれ未見なので、両書の万卷樓刊本が自新齋刊本の覆刻か翻刻かは確認出来ていない。但し、自新齋刊本『史記萃寶評林』と万卷樓刊本『兩漢萃寶評林』は字様・版式がともに一致しているので、覆刻である可能性の方が高そうだ。

18 富春堂刊本は京都大学文学研究科図書館蔵、世徳堂刊本は台湾故宮博物院蔵。

19 拙稿『世徳堂本『西遊記』版本問題の再検討初探——他の世徳堂刊本小説・戯曲との版式の比較を中心に——』（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第二二号、二〇〇九年）参照。

20 少泉李潮聚奎樓刊本には、例えば封面中央に「壬子（万曆四十年、一六二二）春月李氏聚奎樓梓」、巻一首第二（四）行に「太史 雲嶠 劉曰寧 纂／狀元 瀛海 張以誠 校／書林 少泉 李潮 梓」とある『新鐫劉雲嶠太史摘纂然然故事』五卷（内閣文庫蔵）がある。

※ 本稿は平成二十七年（二〇一五年）度日本学術振興会科学研究費補助金（研究活動スタート支援、課題番号：二五H〇六二三）の助成を受けた研究成果の一部である。